



肉尻くらべ

義母と幼なじみの汁だくご奉仕

庵乃音人

挿絵／岬ゆきひろ

立ち読み版

第一章	寝乱れたママのふとももの奥	4
第二章	幼なじみの誘惑	31
第三章	ママと混浴、そして	80
第四章	幼なじみとお便所エッチ	147
第五章	燃え上がるママへの激情	197
第六章	汁まみれのドロドロ3P	243
エピローグ	ママの裸エプロン	282

登場人物

Characters

新藤 純

(しんとう じゅん)

奥手で生真面目な性格の少年。瑠子に対し義母以上の想いを抱いている。

新藤 瑠子

(しんとう ようこ)

純の義母。一年前に純の父である夫を亡くし、現在は純と二人暮らし。清楚で母性豊かな女性。グラマラスな身体を持つ。

愛沢 水希

(あいざわ みずき)

純の幼なじみ。純とは幼少期に引越して以来、会っていないが、突然やってくる。美しく成長し、一見大人びた雰囲気だが……。

「——エッチなこと。お姉ちゃん、純にならしてあげてもいいわよ？」
囁き声で、水希は言った。

（ああ、嘘だろう……）

純は信じられない思いで身をすくめる。

「こういうことするの、初めて？ 私が相手でもよかった、純？」

秘めやかな囁き声で水希が言った。純の腰に、自ら股間を押しつけてくる。細い指を肩に置かれた。水希は目を閉じ、顔を近づける。

（み、水希姉ちゃんが、僕に、キス、を。あああ……）

声をあげることもできなかった。柔らかで温かなものがふにゅつとひしゃげ、純の口に重なる。そのとたん、ペニスがキュンと疼いた。唇とペニスが快楽神経で一つに繋がっていることを、生まれて初めて純は知る。

（キスされた。お姉ちゃんに。あ、あり得ない……ううっ、でも、これがキス……）

初体験のキスに、少年はうっとりとして全身を酩酊させた。水希の鼻息に顔を撫でられる。年上の幼なじみは右へ左へと顔を振り、唇を押しつけた。

「むう、お、お姉、ちゃん……」

「純。肩の力抜いて。大丈夫。んむうう……」

硬くなる純をリラックスさせようとしてか、甘い声で囁く。菌と菌がぶつかり、水希は「んう」と声をあげた。

言葉や態度は大人びていたが、水希の挙措にもどこかぎこちないものを感じる。

もしかしたら、恋人がいるのに幼なじみといけないうことをしてしまっていることへの後ろめたさが、そうさせるのかも知れないと純は思った。

ジャングルジムから移動していた。公園の遊歩道を脇に入った木立のなかの、人気がない場所。鬱蒼とした木々のおかげで周囲と隔絶されている。

昔よく、水希と二人で探検をした懐かしい一角だった。まさかそれから十年近く後に、同じ場所で大人の世界を探検することになるとは思わない。

「むん。純。舌出して……」

唇を押しつけ合ったせいだろうか。水希の美貌は淫らに紅潮し、潤んだ瞳に欲情の気配を宿らせる。自らローズピンクの舌を出し、純を誘った。

「お、お姉ちゃん……」

本当にこんなことをしていいのだろうかという狼狽が、なおも純にはあった。水希は自暴自棄になっているだけの気がする。

しかも純には純で、おもいびとがいた。こんなことになるなら変に隠し立てせず、正直に今の状況を白状すればよかったと後悔する。

だが、いけないことをしてしまっているという罪悪感はあるながらも、いつも興味津々で妄想し続けた「女のひとのエッチな行為」が突然現実のものになり、はしたない興奮を覚えている自分もいた。

瑤子の悲しそうな顔を思い出し、胸が苦しくなる。

しかし水希の誘いを拒むことは難しかった。

一つは純の——よくいえば優しさ、ありていに言えば優柔不断さのゆえ。そしてもう一つは、水希という女性があまりにも魅力的すぎたからだ。まったりと水希と過ごすうちに、気がつけば幼いころの初恋の気持ちがいじわりと蘇っていた。

（ああ、お姉ちゃんを舌を。も、もしかしてこれって……）

純はおずおずと舌を差し出し、水希と戯れ合わせ始める。

（べ、ベロチュー!!）

「むふう。あん、純……」

ピチャ。ピチャ。ピチャ。んぢゅ……ちゅ。ニチャ。ぢゅば……。

舌同士が擦れるたび、甘美なひりつきがペニスを襲った。射精盛りの性器はむくむ

くと硬度を増し、ジーンズの股間を突き上げだした。

(水希姉ちゃん、何てスケベな顔……)

年上の幼なじみはうつとりと瞳を閉じていた。それをいいことに、純は細く目を開け、超至近距離で見る。

思いきり舌を突き出しているため、可憐な美貌が不様に崩れた。左右の頬がえぐれるように窪み、濃い影ができている。鼻の下の皮が伸張し、形のいい鼻孔がいやらしく突っ張った。ふだんの愛らしい顔とのギャップに恥悦を煽られる。

(それにしても、ベロチューって、こんなに気持ちいいものだったんだ)

ディープキスで乱れる表情の淫猥さにもそそられ、純の性感はいつそう鋭敏さを増した。温かな口内はたつぷりの唾液でぬめりきつている。水希の舌に触れるたびに、鳥肌が立った。甘い吐息に顔を撫でられ、脳髓が妖しく痺れる。

純はとろける心地で、舌同士を絡めあわせる快楽に浸った。

そんな少年の股間を、いきなり水希の指が撫でる。

「むあつ、お、お姉ちゃん……」

「あん、もう、こんなに。んっ……」

純はうろたえた。ペニスが浅ましく勃起したことを知られてしまう。撫で上げられ

る股間から背筋に向かつて、恍惚の悪寒が駆け上がった。

「感じてるのね、純。ンフフ、し、してあげようか……」

水希が舌を離す。二人の舌に淫猥な涎の橋が架かった。

「してあげるって、何を？」

どきまぎしつ、懸命に平静を装って聞く。水希は赤らんだ美顔を妖しくほころばせ、「今、純が想像していること」と密やかな声で囁いた。

「えっ。お姉ちゃん。あつ……」

いきなり水希が屈みこむ。もろに股間を見られたらしい。「まあ」という驚きの声に、純はいたたまれなさが募った。

「あつ。えと……ンフフ、エッチな子。こ、こんなにおつきくして……」

まただ。やっていることは大胆なのに、表情やしぐさ、声音に羞恥めいたものが入り混じる。純は不思議な気持ちになった。

「ね、ねえ、お姉ちゃん。あの、無理しなくても……」

「フフ、怖がらなくてもいいの」

現実感が希薄だった。水希にベルトを緩められる。ジーンズのボタンをはずし、フアスナーを下ろした。ためらいの間があったように思えたのは気のせいかな。ついには

トランクスごと、膝までずり下ろされた。

「あつ、すごい……」

「ううっ、見ないでよお」

純は顔が熱くなる。イカ臭い腐臭を放ち、身も蓋もなく反り返った男根が露わになった。暗紫色の亀頭がぷつくりと膨らみ、肉肌をてからせる。水希は大きな瞳をいつそう見開いて、雄々しく勃った肉棹を凝視した。

「お、男の人のおちんちんって……こんなに大き……」

「えっ？」

「あ。ううん、何でもない。フフ、すごく興奮してるのね、純……」

水希は慌てて打ち消し、エロチックな上目づかいで純を見た。

（今の、どういう意味だ？ 僕のちんちんが初めてってわけはないだろうし）

言葉の真意をはかりかね、狼狽した。だがそれ以上思考を巡らせる余裕はない。水希が手を伸ばし、ペニスをそつと握りしめた。

「うくう」

「熱い……純、ほら、こ、こうでしょ？」

甘ったるい声で言うと、水希はおもむろにペニスをしごき始めた。

「うわっ。うわっ。ううっ、お姉ちゃん」

首筋が引きつるのが分かる。思いがけない激感が、陰茎から四肢の隅々に弾けた。しまったと思ったときは遅かった。亀頭の先からどぴゅつとカウパーが漏れる。

「きやつ。もう……出ちゃったの？」

「……えっ？」

「あれ……これ……精液じゃないわよね。やだ、私ったら」

水希が顔を真っ赤にした。勘違いをごまかすように、いつそう激しいしごき方で棹の部分をしごき立てる。

漏らした先走りが潤滑油になり、水希の指が快適に棹を行ったり来たりした。

ぐちよ。ヌチャヌチャ。ぴちや、ぐちよ。ヌチヨ……。

「んああ、気持ちいい……」

天を仰ぎ、思わず嘆声を零す。

「気持ちいいの？ えっと、ここが……一番いいのよね？」

水希の指が棹から先端に移動した。思いがけない強さでギユツと亀頭を絞られる。

「うわっ」

「ひやつ。ごめんね。強すぎた!？」

「へ、平気。うん」

痛みというより、自分では決してできない締めつけだった。悪くない快感が走ることを知り、陶然とする。だが水希を見る限り、自覚してやったわけではなさそうだ。

(経験、けっこう少ないのかも知れない)

十七歳の高校生から見たら大人びた感じはするものの、想像したほど男慣れしているわけではないように思える。そのくせ、童貞少年を惑乱させる誘いを痴女みたいにかけてくるのだから、よく分からない。

「こんな、感じ、よね？」

水希は再び亀頭を愛撫した。今度はほどよい緩急で指を使い、やわやわと揉みつぶしながら肉傘を擦る。強い快感が煮沸した。股のつけ根がひきつり、耽美な悪寒がさざ波のように背筋を駆け上がる。

「あああ。たまらない……」

木の幹に体重を預け、目を細めてうっとりした。

決して巧みではなかったが、水希に手コキをしてもらっていると思うだけで射精感が募る。純は肛門括約筋を窄め、吐精の誘惑に抗った。

「あん、いやらしい。おちんちん、びくびくいつてる……」

水希は可憐な美貌を紅潮させ、興味津々の目つきでペニスを見る。まじまじと凝視され、純は気恥ずかしくなった。

「だって、気持ちいいんだもん。あつ、ああ……」

お世辞ではなく答えた。自分の手でしごくより百倍はいい。水希の白く細い指が不浄な陰茎と擦れあっているなんて夢のようだ。

「ほ、ほんと？ 嬉しいな。それじゃ、あの、えつと……」

しこしここと亀頭をしごきながら、水希は潤んだ瞳を揺らめかせる。火照った小顔が、よけい赤みを増した。何か言いかけたものの、水希は後の言葉をためらう。

「お、お姉ちゃん？」

「あ、だから、その……んんっ」

思いきった様子で、水希が行動に出た。

（えっ。ああ、嘘っ）

純はびくんと身体を震わせる。柔らかくてぬるぬるしたものが、突然棹に押しつけられた。目を剥いた。水希がペニスから指を離し、代わりにキスをしたのである。

「ううっ。水希姉ちゃん。き、汚いよ……」

驚きが羞恥に変わった。指で触ってもらうのも気が引けたのに、口でなんて申し訳

なすすぎる。だがそうは思いつつ、歡喜の悪寒が背筋を駆け上がった。

「汚くない。純のおちんちんなら、お姉ちゃん、汚いなんて思わない。んっ……」

水希は目をつむった。ローズピンクの舌を必死に突き出し、反り返った肉棹をれろんと舐める。

「うわっ。うわああ」

「い、痛いんじゃ、ないわよね？ んっんっ……」

湯上がりのように、美貌が火照った。水希は一心に舌と首を動かし、棹から亀頭へと何度も舌を跳ね上げる。

（何これ。気持ちよすぎるっ）

全身を硬直させ、慄然とした。もちろん、フェラチオ行為を知らなかったわけではない。だが舌でペニスを舐められることが、これほどの快感をもたらしてくれるものとは思わなかった。

「お、お姉ちゃん。たまらない……」

「はんっ、エ、エツチね。んっ……ほら、大サービス」

艶めかしい声で言われた。水希は顔の位置を変え、上から亀頭に口づける。

「わっ。ああ……」

酸味混じりの電流が鈴口から全身に爆ぜた。暴発しそうになり、齒を食いしばる。両手を純のふとももに当てると、水希は顔を下降させた。

「わあっ」

窮屈なぬめり肉が亀頭を包みこんだ。締めつけの位置が、どンドン根元に移動する。

「うむう、じゅ、純……」

「わっ。わっ。わっ。うくう……」

ついに、唇が根元に達した。喉奥でギュルルと音がする。水希は苦しそうに顔を顰めた。相当無理をしているはずだ。まるで魚を丸呑みした鵜のようだった。

「むぐう。んっ……」

(う、動きだした)

水希はおもむろに首を振り、窄めた唇とぬめる口腔粘膜でペニスを愛撫する。たっぷりと唾液を肉棒にまぶし、亀頭の先まで唇を戻しては、またも喉の奥まで一気に啜えこんだ。純は不様な呻き声を上げ、めくるめく快感に恍惚となる。

「あうう、お姉ちゃん。何これ。あっあっ。気持ちいい……」

「んむう、いい、のよ。んんんっ。いっぱい、気持ち、よくなって。むんうう」

くぐもった声で水希が答えた。生温かな鼻息が純の陰毛をなびかせる。強い締めつ



けとともに、ぬるぬるした粘膜が怒張をすごいた。

(舌で舐められるだけより、この方がずつといい。ああ……)

鮮烈すぎる刺激に浮き足立ち、歡喜にかられる。

とりわけ心地いいのは、肉棹を包みこむ朱唇がカリ首の出っ張りを通過する瞬間だった。肉傘と粘膜が擦れあい、腰が抜けそうな激感が閃く。

「むふう、むふう。あん、ほんとにおつきい……んくう……」

「水希姉ちゃん。どうしよう。これ、最高だよお……」

「んっんっ。純……」

ぢゅぼぢゅぼ。ピチャ。ぢゆるぶ。れぢゅれぢゅ。ニチャ。ぴちゃ……。

ぞくぞくと鳥肌が立った。駆けめぐる血液が沸騰を始める。

(しゃ、射精しそう)

決壊の瞬間が近づいてきた。ずっとしゃぶり続けてほしいのに、気持ちよさが増せば増すほど、吐精衝動が膨張する。

「ううっ。お姉ちゃん、お願い。舌も、使つて。ああ……」

はしたないおねだりをした。せめて最後まで強烈な快楽に酔い痴れて果てたいという欲望に憑かれる。

「んああ……」

瑠子は乳肉で棹をしごきながら、首を上下に振り始めた。ぬるぬるした口のなかをペニスが رفتたり来たりする。窮屈な口腔粘膜の筒に棹を擦過された。喉奥深く飛びこむ亀頭を待ち受ける動きで、舌がネチョネチョとまとわりついてくる。

(ああ、気持ちいい……)

爆ぜる快感がさっきまで以上に強烈になった。豊満な乳肉の柔らかさとぬめりに、口腔粘膜のとろみと舌のざらつき感が加わって、酸味混じりの快感が膨張する。

熱湯がしぶくような恍惚が閃き、目の前で白い光が炸裂した。

「あっあっあっ……」

「むぶう？ 純……痛いのか？ んっんっ……」

純の反応を気づかない、くぐもった声で瑠子が聞く。

「えっ？ あ、違う。全然痛くない。ママ、夢みたいだよ……」

甘酸っぱい恥悦にかられ、今にもペニスがとろけてしまいそうだが。

だが、もつともつと気持ちよくなりたかった。純はマットレスに両手を突いて仰け反り気味に上体を傾け、瑠子に向かって股間を突き出す。

「むぶう。ママも同じよ。ほんとに……んっ、夢じゃ、ないのよね。無事に、帰って

こられてよかった。んっんっ……」

ペニスを咥えたままなので、聞き取りにくかった。

しかし瑤子はデュポデュポと肉棒を舐めしやぶり、甘い声で言う。そんな義母の言葉に純は感激し、陰茎の感度を上げた。

「ママ。ちんちん、いっぱい痺れちゃう。ねえ、動いていい？ 我慢できない……」
水希に口奉仕してもらったときもそうだった。淫らな快楽で理性が麻痺し、じつと受け身でいるのが堪えられない。

「むふうん。いいわよ。好きにしているの……」

「ああ……」

許しを得た純は、ベッドに手を突いたまま腰をくねらせ始めた。

今にも唇の端が裂けてしまいそうなほどまん丸に広がった口のなかで、生殖への渴望を露わにした肉砲が、いつそう猛々しく出たり入ったりする。

ズリズリ。ズリ、ズリズリ……。

（んああ。天国だ）

窮屈な肉輪に龟头をしごかれ、骨抜きになりそうだった。純は低く呻き、ぐにやりと曲がりそうな両肘を必死に突っ張らせる。

「んむう。ああん、純……むぐつ、むああ。んんっ」

「くう、気持ちいいよう。ママ、苦しい？ いっぱい……動いちゃう……！」

心苦しきさはあるながらも好色な願望を抑えられない。純の卑猥な突きを受け止め、思いきり口を開いたまま身をこわばらせる義母の姿にも淫情をそそられた。

「あんん、純。いいのよ、動いて……ママのお口で気持ちよくなって。んむぐう」

サイズ違いに思える剛棒を無理やり咥えこんでいるため、清楚な美貌が不様に崩れる。だが瑤子は純のために恥を忍んで口を捧げ、乳房で棹をムギユムギユと擦った。

（嬉しすぎる……）

多幸感が、生殖本能を刺激する。瑤子に甘えたい気持ちだが、獐猛なピストンの動きに変質した。しゃくくる動きで腰を使い、龟头を口腔粘膜に、棹を乳肉に擦りつけた。

「ぐむう。んんっ。あん、純……激しい……むふう、むふう……」

「くうう。ママ、気持ちいい。ああ、出ちゃう……射精するよ……！」

射精衝動が膨張する。上下に振る腰の動きがまがまがしいものになった。

食道へと続く喉奥の穴に龟头が飛びこみ、変な角度に屈曲する。抜けるたびに鈴口の出っ張り穴の縁が擦れ、にゅぼん、にゅぼんと間抜けな音を立てた。

「んむぐう。ああん、純……いいのよ、出しなさい。いっぱい出して。んむう」

瑤子の肉体にも快感が駆け抜けるのか。くぐもった呻き声には秘めやかな欲情の氣配があつた。豊艷な女体がエロチックにくねる。肉棹をしごく乳が、互い違いに上下しだした。猛る牡莖を揉むようにあやされ、尿口から先走りが噴く。

「くああ、だめ。ほんとにもう出ちゃう。ママ、口のなかに、出していいの？」

腰をくねらせ、怒張を叩きこむ。瑤子の口から、押し出されるようにネバナバした涎が溢れ出し、細い顎を伝つて粘り伸びた。

「むふん、いいのよ。出して。純の精子……ママのお口のなかに……むぶう」
「ママ……」

背筋を駆け上がる恍惚のさざ波が、切実に荒々しさを増す。精液の通り道が甘酸っぱく痺れた。煮こまれた子種が、陰囊のなかで泡立つ。全身に大粒の鳥肌が立った。

「むああ、気持ちいい。ママ、イクよ……射精する！ んあああ！」

「むはああ、純……！ むぶぶう、激しい……んむぶぶぶぶうう!!」

どびゅどびゅどびゅうつ！ びゅるるつ！ どびゅどびゅどびゅびゅううう！

間歇泉が噴き上がるような衝撃が、純の身体を震撼させる。

頭のなかが真っ白になった。気がつくつと、純は根元まで深々と瑤子の口のなかにペニスをおねじり込み、吐精の悦びに溺れていた。

「んあつ。ママ……」

義母の口に、水鉄砲のようにザーメンをぶちまける。射精の勢いは、恥ずかしくなるほどだった。身体から一気に汗が噴き出す。

「んぐう……出しなさい、全部。ママのことは……いいから……むぶぶう」

瑤子は、純をリラックスさせる口調で答えた。純は安堵する。

「ごめんね……最高に、気持ちいい。あああ」

窮屈に折れ曲がったペニスの先は、ずっぼりと食道に埋まっていた。純は大量のザーメンを、胃袋目がけて吐く。

「んくう、むん、んぐう。んああ……ぐんう……」

射精のたびに肉茎が膨らむため、瑤子の口がさらに突っ張り、まん丸に広がった。清楚な美貌が惨めに歪むが、瑤子は純のために堪えてくれる。

「んはああ、ママ……ああ、ママっ！」

ようやく吐精衝動が収まった。純は腰を引き、義母の口から、続いて巨乳の谷間から、ずるりと怒張を抜く。

「ぶはああ……あん、いやん……」

こぼっ——逆流した精液が、瑤子の口から一緒になって飛び出した。

瑠子は顔を洗うように両手を合わせ、溢れた精子を受け止める。湿った音を立て、とろけた糊にも似た白濁が掌に滴った。

義母が口を閉じる。苦しそうに鼻息が漏れた。

「マ、ママ……無理しないで。出して。口のなかに溜まってる精液……あっ」

心苦しくなって言うと、瑠子は天を仰いだ。小鼻をひくつかせ、絶対に口を開けまいとする顔つきになる。ごくり——白い首に引きつりが生まれ、艶めかしい嚙下音が響いた。何度も喉が鳴り、精液が飲み干されていく。

（の、飲んでくれてる、僕の精子を。ああ、嬉しい……えっ）

口中の子種を飲み終えたらしい瑠子は、再びうつむいた。純は目を見開く。瑠子が首を伸ばし、精液まみれの掌に顔を近づけた。

「ママ!!」

「んっ……」

唇を窄めた瑠子は、溜まった精子に又チョッと口をつける。

ちゆるちゆる。ちゆるちゆるちゆる……。

（ええっ。う、ううっ。いやらしい）

下品な音を立て、漏らした精液を吸った。どろっとした汁が吸引され、肉厚の朱唇

のなかに飛びこんでいく。日ごろ慎み深い瑤子が、まさかこんなことまでしてくれるとは夢にも思わず、純の喜びはいつそう苛烈なものになった。

「ああ、ママ。エッチすぎる。こ、興奮するよお」

たつぷり精を吐いたというのに、ペニスはちつとも萎えなかった。それどころか、思いがけない瑤子の姿にあてられ、脳髓の沸騰感がよけいに高まる。

純は慌ただしくTシャツを脱ぎ捨て、全裸になった。掌の精液をあまさず啜り取った瑤子の手を取り、ベッドに引つ張る。

「あん、純。んはああ……」

仰向けになり、瑤子を受け止めた。胸元の乳房を揺らし、熱い吐息を零して義母が覆い被さってくる。豊麗な生乳が胸板に密着し、平らにひしゃげた。痾った乳首が食いこみ、焼けるような熱さと硬さを純に伝える。

「し、したい。ママとセックスが……セックスがしたい！」

恥も外聞もなく、欲望を口にした。瑤子は「あはあん」と嘆声を漏らし、額や頬に張りついた純の髪を色っぽい手つきで撫で上げる。

「したい、純？ ママとセックスが……エッチなことがしたい？」

「し、したいよう。したい！ ママと……子供作る、いやらしいことしたい！」

「んああ、こ、子供作る……いやらしいこと。ふはあ……」

自分の言葉に、瑠子の痴情もさらに増した気がした。

煌めく瞳に淫靡な艶が混じり、どろっと濁る。息苦しそうに、はあはあと喘いだ。

「いいわ。子供作るっ。ママと純が絶対にしちゃいけない、エッチなことしよ……いっばいしちゃおっ！」

燃え上がる興奮に、瑠子は声を震わせる。熟れた女体が淫猥にくねった。そんな義母のあでやかさに昂揚し、純は「ああ、ママ……」と呻いて答える。

瑠子が身を起こし、膝立ちになった。セクシーなまなざしで純を見下ろす。

（ああ……）

はちきれんばかりの艶乳は、下から見るといつそう淫奔な量感が強調された。ちよつと動きたびにフルフルと肉を震わせ、純の股間を甘酸っぱく疼かせる。

「あん、ドキドキしちゃう。ふはあ……」

瑠子は腰の脇に両手をやり、顔もそちらに向けた。くびれた腰に官能的な皺がでてる。スカートのリボタンをはずし、ファスナーを下ろした。裾を掴み、Tシャツでも脱ぐようにたくしあげ、首から脱いだ。

乱れた髪があだっぽく波打ち、肩で躍る。汗と体臭がミックスした乳臭いアロマが、

熟れた肉肌から香り立った。

「うくう。すごい……」

剥き出しになった瑤子の下半身は、やはり圧巻の一語だ。細腰から一転し、大胆なポリユーム感で横と後ろに張り出している。

そんな股間と尻を、サイズ違いではないかと思うほどばつんばつんに、ベージュのパンティが包んでいた。下着の縁が食いこみ、肉を盛りあがらせる眺めが猥褻だ。

健康的な太さをたたえたふとももの逞しさも、純を息苦しくさせる。

「ああ、純……」

瑤子はくねくねと尻を振り、両手を三角形の下着の縁にやった。いよいよパンティを脱ごうとしている。

「あ、待って」

歓喜の瞬間を前に、純はうわずった声でストップをかけた。

瑤子は「えっ？」という顔つきで純を見る。

「あの、ママ、お願いがあるの……」

とても勇気の要る願望だった。だが半裸の熟女の色香に当てられ、どうしても言わずにはいられなくなる。瑤子は艶っぽい微笑を浮かべ、「な、なに？ 言っでご覧な

「さい」と純の背中を押した。純は心臓をとくとくと拍動させながら、息を吸いこむ。
「よ、よかつたら、僕の顔にまたがって、パンツを脱いでくれない？ ぼ、ぼ、僕に……お尻を向けて……」

「まあ……」

驚いて、瑤子が目を見開いた。気恥ずかしさが募り、純は顔が熱くなる。しかし、もう言葉にってしまったのだ。今さら何もなかったことにはできない。

「お、お願い！ さつき、僕がしてほしくて我慢してたこと何かあるかって聞いてくれたよね？ もし、願いを叶えてもらえるなら……」

「お尻を向けて……パ、パンツを、脱ぐの……？」

「それでそのまま、和式便器に屈むみたい……僕の顔にお尻を押しつけてほしい」
「えっ。じゅ、純……」

闇のなかでも、瑤子の顔がいつそう赤くなったのが分かった。まさに、変態根性丸出しのおねだり。しかし、本当に憧れていた夢想なのだ。まさかこんな風に、瑤子に頼める日が来るとは思わなかったが。

「ママ、お願い……」

「そ、そんな真似をしても、ママを嫌いにならない？」

とまどいながらも、瑠子は純の期待に応えようと覚悟を決めかけてくれた。

「な、なるもんか。そんなこと言うなら、僕の方こそ嫌いににならないで……」

「ああん、もう……」

昂揚感に悩乱するように、甘い吐息を零す。瑠子は立ち上がった。Gカップの胸乳を、もう隠そうともしない。たふたふと扇情的に揺らし、純の顔に近づいてくる。

「……ほんとに、してほしいのね？」

羞恥に悶え、瑠子は聞いた。純は万感の思いとともに「うん」とうなずく。瑠子は大きく深呼吸をし、溜息を震わせた。緊張と興奮が、純にも伝わる。

「いいわ……でも、絶対誰にも内緒よ？」

瑠子に釘を刺され、純はもう一度、激しくうなずいた。

「動かないでね。ぶつかると危ないから。うっ……」

母親らしい気づかいを口にし、純の頭に足が触れないよう注意して顔をまたぐ。

肉感的な女体が、逆V字状に両脚を広げて純の真上に立った。

「んああ、ママ……」

長いこと一つ屋根の下で暮らしてきたのに、瑠子をこんなアングルから見上げるのは初めてだ。純の身体は発熱でもしたように体温を上げる。

卵を孕んだししゃもを彷彿とさせる、あでやかなふくらはぎ。膝裏の窪み。ふとももが股のつけ根に到達し、丸い尻たぶとの間に横一線の濃い影を刻んでいるのもいやらしかった。

「ママ、来て……」

「ああん、純。ママ、恥ずかしい。すごく恥ずかしいの……」

いよいよ、という段になり、様々な感情が一気に高まってきたのだろう。ベージュのパンティに包まれた巨尻がエロチックにくねった。

「お願い、ママ……」

「んはあ、どうしよう。ママにこんな恥ずかしいことさせて……純の馬鹿。ふわあ、ママ、ママ……ああん……」

「あつ……」

瑤子の両手がパンティの縁にかかる。「ああ。あああ」と艶めかしい声を上げ、いつそうプリプリと、左右に臀肉が振り立てられた。

ずるり——ようやく腰から下着の布がずれる。小便を我慢する子供のように交互に足を踏みしめ、いやらしく尻を振りながら、瑤子はパンティを脱いだ。

（ああ、お尻の割れ目が見えた……うくう、大きいお尻、たまらない……）

パンティが桃尻を下降する。臀裂に続いて蟻の門渡りが露出した。

もっちりした女体が前屈みになる。巨艶な桃尻が後ろに突き出された。豊満な巨乳よりさらに大きな熟れ尻が肉を突つ張らせ、たおやかな球形を強調した。

「あああ……」

ずるずると、なおもパンティがずれ、布が裏返る。

媚肉に密着していたクロッチがなかなかワレメから剥がれず、布が伸びた。ニチャツと音がし、ようやく剥がれる。肉ビラの狭間から音を立てて、愛蜜が滴った。

（オマ○コのビラビラ、完全にめくれ返ってる。花みたい……）

発情を露わにした牝肉を目のあたりにし、涎と精液まみれのペニスがピクンと脈動した。膣穴から溢れた牝汁は陰唇ばかりか、漆黒の恥毛までをもぐつしよりと濡らしている。濡れたせいでよい黒々と艶光りする秘毛の繁茂がいやらしかった。

「どうしよう……ああん、純、ママ……すぐエッチな気分……ふわああ……」

瑤子はふとももの半分ほどまでパンティをずり下ろした。色っぽい喘ぎを零し、盛んに足の位置を踏みしめ直す。尻の肉とふとももが波打って震えた。身体を二つ折り気味にしているため、ぶらりと乳房が垂れ、あでやかに肉房を揺らす。

（た、たまらない……）

「来て。ママ。ああ、僕もメチャメチャ興奮する……」

こらえきれず、純はペニスに手を伸ばした。握りしめてしこしこごとしごと、瑤子の喉から「ふわぁ……」とひとときわ悩乱したよがり声が漏れ出す。

「やん、純。ママのお尻の穴を見て、ちんちんしごいちちゃってるの？ あん、いやん……そんなにしこしこしたら、ママ……ああぁ……」

「ママ、お尻を僕に押しつけて！」

「ふはああ……んはああ……」

瑤子の尻が下降し始めた。一二つ並んだ熟れ肉の小玉スイカが純の顔面に接近する。身体中に炭酸水が染み渡るような激感を覚えつつ、純はペニスをしごく手の動きを速めた。瑤子の涎と精液の残滓のせいで、すべりは快適だ。

「やん、いやん、ああぁ、ちんちんしごいてる……ああん、親子なのに……母親のお尻見ながら……子供がちんちん、いっぱいしこしこしごいてる。あん……ああぁ！」

「くうう、ママ……あつ」

双子の尻がくぱつと左右に割れ、アナルが丸出しになった。珈琲色をした糞門がひくひくと収縮する眺めが猥褻だ。

（ああぁ……）

純は息を飲む。そんな純の顔に肉尻が近づき、視界が塞がった。むぎゆう――。

「むぐんおお……」

「ふはああ。やん、純……ああん、どうしよう……私ったら、お尻で息子の顔を……

おおん、おおん。ちんちんしごいてる……この子ったら……ちんちんをおお……」

「んぐうう、ママ、もつと体重乗せて……擦りつけて。グリグリしてええ……親子で

……親子でいやらしいことしよう……!」

(最高だ。とろけちゃう!)

麻薬のような恍惚感で全身が痺れた。体重を乗せて尻を押しつけられ、息すらできなくなる。

純は破廉恥な自慰に耽りながら、空気を求めてふがふがと鼻を蠢かせた。そんな純の鼻腔に、尻の谷間に籠もっていた発酵臭が飛びこんでくる。

酸っぱくて、生臭い卑猥なアロマ。便臭はない。だがほんの微かに焼き芋めいた香りがし、純の痴情は一気に煮立った。

「むはあ、ママ……むんっ」

息苦しきかられて陶然としつつ、舌を飛び出させた。又チョッと粘着音がし、皺々の肉の窄まりに舌先が突き刺さる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>